未来へつなぐ

市民インタビュー

Vol.29

災害後の地域復旧を支える
～「大井川建設業協会」の皆さん～



インタビューの様子
奥側　　排水ポンプ隊の皆さん
手前側　右から原崎議員、内田議員、同協会村田理事長、事務局（大井川商工会職員）

議員が直接話を聞いて市民の本音に迫る「市民インタビュー」。

今回は、大井川建設業協会排水ポンプ隊の皆さんにお話を伺いました。

協会の活動

私たち協同組合大井川建設業協会は、建設業の団体として行政から委託を受け、排水ポンプ車操作管理業務（排水ポンプ隊）などの実施や各種災害訓練への参加のほか、「地域と共に歩む建設業協会」をテーマに、地域のごみ拾い・地域イベントへの出展など、地域奉仕作業にも積極的に取り組んでいます。

排水ポンプ隊とは？

排水ポンプ隊は、水害後の生活基盤を速やかに回復するため、主に排水活動を行う部隊で、10年以上の活動実績があります。９名が所属し、水防訓練への参加のほか、排水ポンプ車での災害対応を市から任されています。

排水ポンプ車は、溜まった水を汲み出し排水するためのポンプを積んだ車両です。市が有する３台のうち１台は、当協会が活動に使っています。この排水ポンプ車は、25ｍプールの水を８分程で排水する能力があります。



災害時の活動に使う排水ポンプ車
（大井川中島地区河川防災ステーション）

市からの要請で出動

台風や大雨の際は、雨量や冠水状況により、まず市から当協会に出動の要請が入ります。その後、排水ポンプ隊メンバーをＳＮＳで招集し、排水ポンプ車で現場へ向かいます。作業は雨の中行う場合もありますが、多くは雨が止んでから、地下道や川の水位が高くて水がはけない箇所などの排水にあたります。夜間になることが多いので、出動要請がありそうなときは、前もってメンバーへ声を掛けて待機しています。



出動に備え、年３回の機材点検は欠かさない



瀬戸川の逆流を防ぐため水門を閉鎖し、
排水ポンプ車による強制排水を行った
（令和５年　台風６号　石脇川新水門）

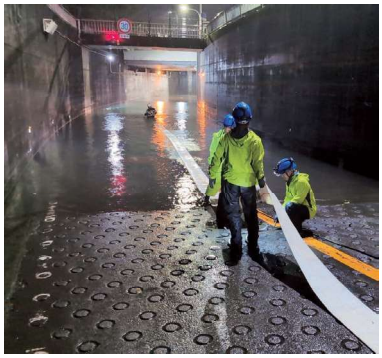
排水作業の現場では

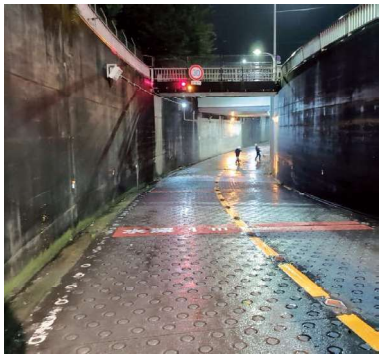
活動初期は装備や道具が不足していましたが、出動を重ねる中で、安全のためのロープやホースを吊る金具など、必要なものを徐々に増やしていきました。排水ホースは特に傷みやすいですね。地面に擦れて摩耗しますし、保管している間にも劣化が進んでしまいます。

私たちの隊は何年も同じメンバーで活動しているので、作業はもう阿吽の呼吸です。危険箇所は大体見当がつくので、雨天時は天気予報を確認して近所を見回っています。

水門での作業は危険なので、本業である建設業とはまた違う怖さがあります。地下道の現場も多いですね。2年前に中港地下道が冠水した際は、排水先まで距離があり難航しました。県道の場合は県から派遣要員が駆け付けてくれるので、協力して作業にあたります。

ホースは水が入ると一気に重くなります。排水後にホースに残った水を抜くのも体力がいりますね。





左が作業前（水位は腰付近）、右が作業後
（令和6年　台風10号　中港地下道）

被害は備えて抑えたい

以前は2、3年に1度の出動でしたが、令和になってからは毎年出動しています。

排水ポンプ車で水を抜いたあとも気は抜けません。排水後に残った泥は、乾いたときに汚れを含んだ埃になるので、衛生面での対応が必要です。大井川地域では泥ではなく、稲や流木が非常に多くて、道路をふさいでしまいます。特に、稲刈り時期に台風の予報が出ると、皆さんお米を守るために稲刈りをされます。このとき、水門をきちんと閉めて、稲わらを片付けておかないと、被害が大きくなってしまいます。道路に出た稲わらや流木については撤去作業を行い、市が設置する仮の処分場に運ぶのですが、片付けるのに1週間かかったこともあります。

水害は自然相手なのでどうすることもできませんが、被害の大きさは備えで抑えることができます。災害後の復旧を早めるためにも、雨の前には、敷地や道路脇に流されそうなものがないようにしてもらえるとありがたいですね。

それから、排水ポンプ車には発電機が搭載されていますので、災害後の電源車としてもお役に立てればと思っています！



(協)大井川建設業協会　排水ポンプ隊の皆さんに、
感謝と敬意を込めて・・・ありがとうございます!!

インタビューに答えてくれた皆さん

協同組合大井川建設業協会

理事長　村田康久様

排水ポンプ隊の皆さん

（取材協力：大井川商工会様）